

保護税ハ唯僅ニ數種ノ事業ヲ發達セシムルニ足ルノニシテ且其製
 品ノ價廉ナルヲ得ス故ニ之ヲ廢シテ各人ヲシテ土地人情ニ適スル所
 ナリ察シテ自由ニ營業ヲ爲サシムヘシ然ルトキハ土地ノ適スル所人情
 ノ好ム所自然ニ百般ノ業務ヲ發達スルニ足ルヘシ且内國諸營業ノ進
 歩ヲ助メル者ハ外國ノ競争ナリ然ルニ今保護税法ヲ行フテ其競争ヲ
 杜絶スルトキハ内國營業者ハ殆ント獨占ノ權アルカ如クナルヲ以テ
 其現在ノ地位ニ安シテ更ニ進取ノ氣象ヲ鼓舞スルコトナシ故ニ諸般ノ
 事業事退歩スルモ進歩スルノ望アルナリト是等ノ諸説其初メニ於テ
 ハ未ダ大ニ社會ニ勢力ヲ得サリシト雖モ保護税ノ弊害漸ク社會ニ發
 露スルニ至リテ其勢力大ニ加ハリ遂ニ關稅法ノ方向ヲ一變スルノ氣
 運ヲ致セ今日ニ至ツテハ或ル國ニ於テハ全ク保護主義ヲ棄テ、而シ
 テ輸入主義ヲ取ルモノアルニ至レリ

保護税ノ歴史ハ今略記シタル所ヲ以テ其梗概ヲ知ルニ足ラン故ニ今
 之ヲ愛ニ止メ次ニ關稅ノ種別ヲ論ゼン
 關稅ハ輸入主義ニ由ルモノト保護主義ニ由ルモノトヲ論セス分テ四
 種ト爲スベシ曰ク輸出税曰ク經過税曰ク輸入税曰ク航海税是レナリ
 而シテ其性質皆同カラスシテ利害亦相異ナリ今其大略ヲ講述ス
 輸出税ハ内國ヨリ外國ニ物品ヲ輸出スルトキ賦課スル租税ニシテ今
 日各國之ヲ行フモノ少シ蓋シ之ヲ賦課スルハ内國ノ爲メニ不利ナレ
 ハナリ而シテ偶之ヲ行フモノアルモ其賦課極テ輕クシテ其收入甚少
 シ
 輸出税ハ内國ニ於テ一種特別ノ天利アル物品若クハ他ニ類品ナクシ
 テ一國獨リ其利ヲ專ニスル物品ニ非サレハ之ヲ賦課スルヲ不可トス
 若シ然ラズシテ輸出税法ヲ行フトキハ多少内國物産繁殖ノ道ヲ壅塞

スヘキナリ我國ノ如キハ從來輸出税ヲ課スルモノ少カラス是レ極ラ
 不利トス故ニ近來政府之ヲ廢シタルモノ少カラサルナリ
 然ルモ一國特産ノ物品即チ米洲白露國ノ烏糞硝酸塩ノ類ノ如キハ之
 ニ相當ノ輸出税ヲ課スルモ外國ニ於テ同種ノ品物ニシテ白露國ノ如
 ク天賦利益ヲ有セサルヲ以テ敢テ内國ノ不利ヲ讓スニ足ラサルナ
 リ
 經過税ハ外國ノ物品内國ヲ通過シテ他國ニ到ラントシテ内國ノ税關
 ニ入ルモノ賦課スル租税ナリ此租税モ亦之ヲ賦課スルヲ可トセサル
 ナリ蓋シ外國品カ内國ヲ通過シテ他國ニ到ルトキハ其量ノ多キニ隨
 ヒ内國ノ商况繁榮ヲ呈スルヲ以テ其通過ハ大ニ内國ニ利アルモノナ
 リ况テ其通過スルカ爲メ内國人民カ營業ノ利益若クハ其賃銀ト
 シテ得ル利益少クトセムナリ試ニ香港ニ見ル國地ハ區域狹隘ニシ

テ人民亦多ク然レモ其商況ノ盛ナル實ニ亞細亞ニ冠スリ是レ其
 故何ヤヤ他ナシ西洋及南洋諸洲ト支那日本トノ間ニ介在シテ物品ノ
 交易場トシテ其港ヲ經由スルニ因ルナリ我日本ニ於テ他日條約改
 正ニ並此等ノ税ヲ賦課セスレテ外國品ノ經過ヲ自在ニセハ米利堅及
 南洋諸洲及亞細亞ノ貿易ニ於テ恰モ今日ノ香港ノ如キ地位ヲ占ム
 ルニ知ルヘカラズ然ルトキハ唯其物品ノ通過スルカ爲メニ大ニ我國
 ノ繁榮ヲ増スヲ疑ナキナリ
 今日各國ノ關稅中尤モ重要ナルモノハ輸入税ト爲ヌ輸入税ハ外國物
 品ヲ内國ニ輸入スルトキニ賦課スル租税ナリ此税ハ物品ノ何類ナル
 ナ間ハス之ヲ賦課スルモ妨クナクシテ各國カ保護主義ヲ以テ課スル
 所輸入主義ヲ以テ課スル所皆此税ニ在ルナリ其保護主義ヲ以テスル
 ト輸入主義ヲ以テスルトハ左ノ區別ヲ以テ之ヲ知ルヘキナリ

内國ニ生産セザル物品ニシテ内國人之テ消費若クハ使用スルニ由
テ之ヲ輸入税ヲ賦課スルモノ及ヒ内國ニ生産スル物品ナルモノ之ヲ
外國ヨリ輸入スルトキハ外國ノ同類物品ニ賦課スルト略相同キ稅
率ヲ以テ課税スルモノハ輸入主義ヲ以テスルナリ

内國ニ於テモ外國品ト同類ノ物品ヲ生産シ若クハ外國品ノ代用ト
爲スルモノ物品ヲ生産スル場合ニ於テ其内國品ニハ或ハ租稅ヲ賦課
セズ或ハ輕稅ヲ賦課シ而シテ外國品ニ向テハ重稅ヲ賦課スルモノ
ハ保護稅ナリ

保護稅ニ賦課スルトキハ政府カ實際收入スル所ノ租稅ヨリハ多ク其
有稅物品ノ消費者ニ課税スルノ實アルナリ例ヘハ今我國ニ於テ木綿
織物ヲ保護センルニ於テ外國輸入ノ金由ニ重稅ヲ課スルトキハ内國ノ
木綿織物ニ其稅額比價ノ價格ヲ騰貴スルニ便令其稅額比價ノ價格

ヲ騰貴セザルニ多少騰貴セザルニ由テカナルヘシ故ニ木綿織物ノ消費
者ニ之ヲ課テ騰貴ノ價格比價ノ價格ヲ騰貴セザルニ可ラス是ヲ以テ政府カ
保護稅ヲシテ收入スル金額ハ多カラサルモ消費者ハ都テ價格騰貴ノ
爲メニ稅金ヲ拂フト同一ノ効果ヲ蒙ルナリ而シテ消費者カ拂フ所ノ騰
貴ノ價金ハ木綿織物製造者ノ手中ニ落ルモノトス故ニ保護稅ヲ行フ
ルハ其消費者ハ現ニ租稅ヲ納メスト雖モ其實木綿製造者ニ租稅ヲ拂
フ其實アルナリ是レ唯之ヲ消費者ニ敢テ製造者ニ與フルモノニシテ
不公平ト謂ハサルヲ得タルナリ

輸入税中保護稅ニ似テ其實然ラサルモノアリ例ヘハ今我國ノ生絲ニ
稅アリトスレハ其生絲ヲ以テ織物ヲ製造スルトモ其稅アルヲ以テ外
國ノ絹織物市場ニ競争スルヲ能ハスシテ製造家損失ヲ蒙ルコトナシ
ト謂フヘカラス此場合ニ於テハ内國ノ絹織物ニハ稅ヲ課セスレテ外

國ノ絹帛ヲ輸入スルニ課税セサルヘカラス何トナレハ内國織物製造
 家ハ甚粗生品ニ於テ税ヲ拂フヲ以テナリ然レモ此等ノ輸入税ハ別ニ
 内國ノ物産ヲ保護スルカ爲メニ非スレテ内外ノ物品ヲシテ平等ノ地
 位ニ立タシメント欲スルニ在ルナリ故ニ此税ヲ稱シテ補償税ト云フ
 即チ單ニ内國人ノ利益ノ地位ニ立ツヲ補償スルヲ謂フナリ然レモ補
 償税ノ名ヲ以テ保護税ノ實ヲ行フモノ今日其例少シトセサルナリ航
 海税ハ保護税ノ一種ナリ分テ三種トス即チ左ノ如シ

- 一内國ノ造船事業ヲ發達セシメンカ爲メ外國ニ於テ製造シタル船
 舶ヲ購買スルトキニ重税ヲ課シ甚シキハ之ヲ購買スルヲ禁スル
 事アリ
- 二外國ノ競争ニ對シテ内國ノ船舶所有者ヲ保護スルハ必要ナリト
 爲シ外國船ヲ入港スルトキニ賦課スル税

三内國商船ヲ遠洋航行ヲ獎勵スルカ爲メ遠方物産ノ產地ニ就テ之
 一ニ購買シテ之ヲ輸入スル者ニ免税シテ而シテ同一ノ産物ナルモ
 其產地ニ非サル處ヨリ輸入スル者ニ課スル税

第三ノ税種印度若クハ南米ノ物産ヲ輸入スルニ其產地ニ就テ購買シ
 タル者ニ免税シテ而シテ他國人カ購買シ來リタルヲ更ニ買受ケテ之ヲ
 輸入スル者ニハ課税スルナリ

輸出入賦課法ニ二種ノ別アリ一チ從價税ト云ヒ一チ從量税ト云フ從
 價税ハ申告者クハ鑑定若クハ證據ニ依リ物品ノ價格ニ從フテ定率ヲ
 賦課スルモノナリ故ニ從量税ハ物品ノ輕重大小長短ニ依リ定額ノ税ヲ賦
 課スルモノナリ故ニ從量税ハ價格ニ比例セサルモノナリ

今下例ヲ舉テ此區別ヲ説明セン例ヘハ織物ニ關稅ヲ課スルニ其價金
 ノ一割ヲ以テスルト爲ストキハ織物税關ニ到着スルニ當リ其荷物主

又ハ代理ハ直ニ税關ニ其價ヲ申告セサルヘカラス税關ノ官吏其價ヲ不當ナリト爲ストキハ鑑定人ヲ呼出シテ之ヲ評價セシム而シテ其評定ノ價格荷物主又ハ代理ノ申告ヨリ高キトキハ税關ニ於テ其物品ヲ買立タルコトアルナリ從價稅ヲ賦課スルトキハ右ノ手數ヲ輕キルヘカ
 ラサルヲ以テ種々煩ハシキ手續規則ヲ要スルナリ故ニ或ハ活潑ナル取引ヲ妨グルコトナキニ非ス又税關若クハ鑑定人カ物品ノ價格ヲ見積ルル貴キニ過クレハ荷物主又ハ代理ハ税金ヲ多ク納メサルヲ得サル
 コトヲ豫メ損失ヲ蒙リ或ハ荷物主又ハ代理カ税關ヲ欺シトシテ非常ニ申告ノ價格ヲ低クスルモ税關ニ於テ之ヲ覺ラヌシテ收入ヲ損スルコトアリ然レハ從量稅ハ物品ノ長短輕重大小ニ依リテ課稅スルヲ以テ此煩雜ヲ免ナリ例ヘハ穀物サレハ一尺若クハ一丈ニ付税金何程ヲ定ムルヲ以テ從價稅スルコト甚ク易ク且紛議ヲ免スコトナキナリ然レモ其

物品ノ價大ニ變動スルトキハ或ハ荷物主若クハ代理ニ損失ヲ蒙ラヌ
 ニ非ナレハ税關ノ收入ヲ損スルノ恐アルナリ從價稅ハ手數又煩ハシ
 シヤ申付時價ニ從テ税金ヲ収ムルヲ以テ荷主及税關共ニ甚ク損失ヲ
 免ルニ非ナリ
 又從量稅ハ其割合動モスレハ富者ニ輕クシテ貧者ニ重キノ弊アラシ
 ク其何ナレハ物品ノ精粗美惡ニ拘ハラズ其長短輕重大小ニ從フテ
 課稅スルヲ以テ其精美ナルモノニ課スルコト重カラズ粗惡ナルモノモ
 輕クシテ云々カクサレハナリ故ニ從量稅ヲ行フトキハ同類物品中ニ階
 級別設ケテ稅率ニ差等ヲ立ツレハ多少此弊ヲ防クコトヲ得ヘキナリ
 又日本ニ於テ初メテ外國ト通商條約ヲ結ビ關稅ノ事ヲ定メシニ實ニ
 寶藏五年(西曆千八百五十八年)ニ在リ當時幕府ハ井上信濃守岩瀬肥後
 守ヨリテ合衆國公使ト條約ヲ商議シ輸入稅則ヲ定メシム其稅則

同一年英國ト結約スル所ニ由リテ少ク變更シ其後慶應二年(西曆千八百六十六年)ニ至リ又英國佛國米國和蘭ト改稅約定ヲ締結セシム今日現行本稅則則是レナリ其初メテ米國ト約定セシ稅則ハ皆從量稅法ヲ用テ其尤モ高キモノハ三割五分其尤モ低キモノハ五分トセリ英國ト商議決定シタル稅則ハ合衆國ト締結セタル者ト大同小異ナリ其屬中ハ所ハ本綿及羊毛ノ織物ヲ從價五分稅品ノ内ニ加ハタルニ在リ本綿及羊毛ノ織物ハ合衆國ト結約シタル稅則ニ從ヘハ從價二割稅品ノ内納在ニ然ルル命之ヲ五分稅品中ニ入レタルヲ以テ我レニハ一割五分納在ニ面シテ英國ニ取リテハ實ニ巨大ノ利益ヲ占メタルナリ蓋シ本綿及羊毛ノ織物ハ英國製造品ノ重要ナルモノニシテ其我國ニ輸入セシ極多ニシテ不故ニ其稅ヲ減シテ五分ト爲スハ英國ノ利益トナリ又佛國佛國ニ對シテ待タザルナリ而シテ此例ハ佛國兩葡葡牙日耳

百八

百九

曼以大利等ノ照單ナル所トナリ且合衆國和蘭佛西亞モ亦此例ニ依リテ要求シ幕府ハ之ヲ拒ムコト能ハズシテ之ヲ許諾セリ蓋シ此ヨリ先ニ佛國和蘭佛西亞等約スルヤ日本政府ヨリ向後外國政府及ヒ其臣民等許可スルキ殊異アルトキハ我政府國民ニモ同様免許アルヘシトノ一條アルニ由ルモノニシテ幕府己ニ英國ニ一ノ殊異ヲ許シタルヲ以テ亦他ノ諸國ニモ之ヲ許サレルヲ得スシテ之ヲ許シタルナリ此殊異ヲ各條約國ニ與フルノ一條ハ我國條約ノ最大環瑾ニシテ稅上ニ於テ事實ニ我レニ不利ヲ來セシモノナリ只此一條アルカ爲メニ彼我互ニ利益ナル所ニ於テ結約セントスルモ我レヨリ或ル一國ニ對シテ利益與タルトキハ他ノ諸國我ニ一ノ利益ヲ與ニスシテ之レト同一ノ利益ヲ受ルルキヲ要求スルノ權アルナリ故ニ此一條ハ實ニ不公平ノ甚キモノニシテ其我ヲ害スルコト尤モ多シトス

慶應二年幕府ハ英佛米蘭四國ト共同ノ商議ヲ開キ改稅約定ヲ決シ愈
 我レニ不利ヲ招ケリ此稅則ハ物品ヲ四類ニ分テ第一類ハ織物類鉛
 錫類藥品等ヲ包含シ貿易主要品概テ此内ニ在リ第二類ハ食料鹽石炭
 金銀貨幣及金銀地金米穀類等ヲ包含シ第三類ハ同片第四類ハ兵器軍
 用品時計刃物硝子器硝子板ハ第一類珠玉酒類食料諸物其他表中ハ記
 載セザル諸品ヲ包含ス而シテ第一類ハ從量稅ニシテ其尤モ高キモノ
 ハ洋紅百斤ニ付一分銀二十一個トス今日貿易主要品ナキ木綿織物類
 綿糸等ハ其稅甚低キ即チ唐棧類ノ如キハ巾ノ廣狹ニ依リテ小異アリ
 且雖地土ヤルトニ付銀二匁六分二厘五毛ヨリ三匁七分五厘ニ出テス
 羅紗ヤ中ヤルトニ付キ九匁ヨリ一分銀一個ト至匁七分五厘ニ出テス
 第五類ハ無稅品ナリ第三類ハ禁制品ニシテ輸入ヲ許サズルモノトス
 第四類ハ從價五分稅ヲ課スルモノトス故ニ此改稅約書ハ稅率ヲ大ニ

減價率ハモノナリ

輸出稅亦同時ニ之ヲ定メ物品ヲ四類ニ分ツ第一類ハ乾魚煎海風華
 品類綿糸類蒸煙草ノ類ヲ包含シ第二類ハ金銀貨幣及金銀銅地金ヲ包
 含シ第三類ハ米麥及硝石ヲ包含シ第四類ハ竹器陶器木炭絹衣服織物
 木材及ヒ表中ニ記載セザル諸品ヲ包含ス其第一類ハ從量稅ニシテ其
 稅尤モ高キモノハ生糸百斤ニ付一分銀七十五個トス茶百斤ニ付一分
 銀三個ト七匁五分ナリ第二類ハ無稅品ナリ第三類ハ禁制品ニシテ輸
 出ヲ許サズルモノナリ第四類ハ從價五分稅ヲ賦課スルモノナリ其後
 生絲ハ一分銀九十個ニ上シ茶ハ同四個ニ上ケタリ
 輸入稅ハ我政府獨リ變更スルコト得スト雖モ或ル一國ト條約シテ稅
 率ヲ減額ナルトキニ他ノ各國ニ通知シテ之ヲ減セサルヲ得サルナリ
 輸出稅ハ我政府隨意ニ賦課若クハ免除スルコト得ルモノナリ即チ銅

ハ明治二年ニ從價五分稅ヲ課シテ輸出スルコトヲ許シ米麥モ明治六年ニ無稅輸出ヲ許シ米麥紛モ亦然リ食鹽内國製「マツチ」同木綿ノリヤス糖糸股引其他木綿織物硝石等無稅輸出ヲ許サレタルモノ其數甚多シ但此等ハ其品數多シト雖モ其稅ノ收入ハ甚少クシテ其一種ニシテ一年一萬圓以上ノ收入アルモノ甚少トス

要スルニ我日本ノ關稅ハ時ニ無稅輸出ヲ許サレタルモノヲ除キ總テ輸出入品ニ課稅スルモノニシテ其手續ヲ要スルコト甚ク多ク而シテ其割合ニハ收入少シトス他日條約改正果シテ行ハレ我ニ稅權ヲ取ル日ニ於テハ輸入品ニシテ内國ニ消費スルコト多キモノニ向テハ其稅率ハ高クシテ而シテ其課稅ノ物品ヲ減シ手續ヲ省キテ收入ヲ増スノ法ヲ設ク又ハ輸出品ニ向テハ多ク課稅セサルノ法ヲ取ラサルヘカラス我邦輸出品中茶生絲ノ如キハ實ニ首要ノ物品ニシテ其輸出甚多シ而

ハ明治二年ニ從價五分稅ヲ課シテ輸出スルコトヲ許シ米麥モ明治六年ニ無稅輸出ヲ許シ米麥紛モ亦然リ食鹽内國製「マツチ」同木綿ノリヤス糖糸股引其他木綿織物硝石等無稅輸出ヲ許サレタルモノ其數甚多シ但此等ハ其品數多シト雖モ其稅ノ收入ハ甚少クシテ其一種ニシテ一年一萬圓以上ノ收入アルモノ甚少トス
要スルニ我日本ノ關稅ハ時ニ無稅輸出ヲ許サレタルモノヲ除キ總テ輸出入品ニ課稅スルモノニシテ其手續ヲ要スルコト甚ク多ク而シテ其割合ニハ收入少シトス他日條約改正果シテ行ハレ我ニ稅權ヲ取ル日ニ於テハ輸入品ニシテ内國ニ消費スルコト多キモノニ向テハ其稅率ハ高クシテ而シテ其課稅ノ物品ヲ減シ手續ヲ省キテ收入ヲ増スノ法ヲ設ク又ハ輸出品ニ向テハ多ク課稅セサルノ法ヲ取ラサルヘカラス我邦輸出品中茶生絲ノ如キハ實ニ首要ノ物品ニシテ其輸出甚多シ而

十年 五〇九四〇七五四

四〇九八五七〇

十一年 五〇一三六三八八

四九七六三二一八

十二年 六〇九六四七二五

五二六四六二七

十三年 六〇七五七五三五

六〇五五九六一

十四年 六〇五二二二六

五三二一六

十五年 六〇九九六五八六

八四五二九四二

十六年 六〇八八一八五二

八八七六二〇〇

十七年 六〇六八四三〇九

四二七七〇五五

十八年 六〇四九四三三五

七七八〇五七九

十九年 六〇三八三〇四

六七三〇四〇

二十年 六〇三三〇四

五三〇五五

二十一年 六〇二二二二六

五七六六三二一八

二十二年 六〇一三六三八八

五二六四六二七

二十三年 六〇〇五二二六

五三二一六

二十四年 六〇〇六八四三〇九

四二七七〇五五

二十五年 六〇〇七五七五三五

七七八〇五七九

二十六年 六〇〇八三一〇四

六七三〇四〇

二十七年 六〇〇八八一八五二

八八七六二〇〇

二十八年 六〇〇九六五八六

八四五二九四二

二十九年 六〇一〇九六四七二五

五二六四六二七

三十年 六〇一二二二二六

五三二一六

三十一年 六〇一三六三八八

五二六四六二七

三十二年 六〇一五二二二六

五三二一六

三十三年 六〇一六八四三〇九

四二七七〇五五

三十四年 六〇一七五七五三五

七七八〇五七九

三十五年 六〇一八三一〇四

六七三〇四〇

三十六年 六〇一九六五八六

八四五二九四二

三十七年 六〇二〇九六四七二五

五二六四六二七

三十八年 六〇二二二二二六

五三二一六

三十九年 六〇二三六三八八

五二六四六二七

四十年 六〇二五二二二六

五三二一六

四十一年 六〇二六八四三〇九

四二七七〇五五

四十二年 六〇二七五七五三五

七七八〇五七九

四十三年 六〇二八三一〇四

六七三〇四〇

五三二一六

五三二一六

五三二一六

五三二一六

五三二一六

ル能ハテトカ故ニ或ハ其害ナルヲ論スルモソア誤キ難キ今日學内
各國消費稅ヲ行ハサルモナアルヲナシテ而シテ實ニ亦甚ク得テ
ル能出ルナリ

蓋シ今日ノ如ク巨額ノ負債ヲ有シ巨額ノ軍費ヲ要スルニ方ヲシハ到
底直接稅ノミヲ以テ其需要ニ應スルヲ能ハス故ニ間稅ヲ以テ之ヲ辨
セサルニカクサルハ既ニ前ニ詳述セタルヲ知リ且消費稅ノ如キハ賦
課ノ方法宜キを得レハ國民ニ至ルマテ苦痛ヲ感セズシテ納稅ノ義務
ヲ負擔シ得可ク且政府收テ稅率ヲ増キス或ハ之ヲ減スルモ其收入ハ
國民ニ富強多ス新事業ヲ自然ニ増加スルヲ得ルモノニシテ其便ナ
ク點檢等當道ニ納稅者致シ生業ノ大カク少クシ租稅ナリ

消費稅ハ昔國稅ヲ徵收シテ今日ニ至ルニテ各
國政府亦宜シク其對價ヲ得ルニテナリ其徵收ノ方法亦國稅アテ即
一

一

一 國稅之徵收者ハ其種類ノ多クシテ其種類ノ別ニテ
一 國稅之徵收者ハ其種類ノ多クシテ其種類ノ別ニテ
一 國稅之徵收者ハ其種類ノ多クシテ其種類ノ別ニテ

第七 本法ニ有テ政府ニ課稅スル所ノ物品ノ製造者ハ其賣買ニ就テ
應テ其賣買稅率ニ依リテ之ヲ主務ノ官吏ハ其營業ヲ監視シ或ハ租
生品製造者製造品ノ出入ヲ監視シ或ハ賣買ニ就テ其賣買者ハ其生
産所ニ出
張ニ就テ倉庫ニ入リテ檢査シ其物品ノ多寡ニ隨テ課稅スルナリ
此本法ニ有テ消費稅徵收法ニ於テ賦課ノカクナルモノニシテ以テ精製
物品等製造者知リ其之ニ課稅シ而シテ好曲ニ移ル賦稅者其賣買者
賦稅者其賣買者知リ其之ニ課稅シ而シテ好曲ニ移ル賦稅者其賣買者

買物ヲ獨古モナルヲリテハ
 獨古ヲ法ヲ行ハ入前等ノ思ナキヲ以テ其業務能價値ニ依ルソシ
 其物價ヲ廉價ト爲シ事業ヲ我權ヲ來スラ免レ得ルナリ故ニ獨古ノ性
 々行方ハ概シテ經濟上得策ニ非サルナリ然レモ或ル物品ニ於テ多ク
 租稅ヲ徵收モシト欲スルニキハ獨古ノ法亦一概ニ排斥スルニ非キ
 レナリ獨古ノ如キハ烟草ノ製造販賣ヲ獨古レ其収入スル所シ登額ニ
 價ヲラシムニ違ハ若シ烟草稅ヲ徵收スルニ第一法若クハ第二法ヲ以テ
 夫レキキハ其年數ヲ製糖ナルノメナラス亦悉クハ此ノ如キ互願ノ
 歳入ヲ得ルニ便シキルハ獨古ノ法亦以テ年數ヲ以テ其歳入額又古時ナク
 年數額ヲ歳入額ト爲シテ其年數ノ實價額等ヲ以テ販賣ヲ獨古スルヲ得策
 本國獨古ノ法能ク其物價ヲ運送費ニ獨古ノ法ヲ行フハ其年數額ヲ

獨古

獨古

ルヲ得ルニ便シキルハ獨古ノ法亦以テ年數ヲ以テ其歳入額又古時ナク
 年數額ヲ歳入額ト爲シテ其年數ノ實價額等ヲ以テ販賣ヲ獨古スルヲ得策
 本國獨古ノ法能ク其物價ヲ運送費ニ獨古ノ法ヲ行フハ其年數額ヲ
 ナリ
 然レモ政府若シ獨古ノ法ヲ續クテ數多ノ物品ニ及ホストキハ國民
 營業ヲ侵蝕スルノ弊ナキ能ハスルヲ其害タルハ最モ厭フヘキナリ其
 特別ノ會社ト向テ獨古ノ權ヲ與フルカ如キニ至テハ其弊尤モ甚シキ
 ニ至ルコトアリテ是レ尤モ戒メサルハカラサル所ナリ
 消費稅ヲ徵收スルハ右國法ノ外酒一法アリ營業免許稅是ナリ然レモ
 此種ノ尤モ能ク消費稅ナル物品ノ營業ヲ爲スルハ賦課タル所ニシテ前
 述ノ如ク徵稅ヲ補助アルハ過ナシ

租稅論

獨古論

我邦ニ於テ今日消費税ト稱スヘキモノハ酒烟草糖油菓子ノ諸税
 及指海道水産税等如キ是レナリ其他賣藥税中馬賣買免許税ノ如キモ
 亦消費税ニ中テ置クベキモノ似テリ
 我邦ニ於テハ從來地租即チ年貢ヲ正税ト稱シ其他諸税ハ總テ之レヲ
 小納成通上ト云ヒ鹽稅ニ對シテ之レヲ雜稅ト稱セヌ而シテ雜稅種目
 ノ多ク三和糖ニ及ベドト云フ是レ昔時封建ノ世各藩區々ニ徵收スル
 所ニ對テ其名稱ニシテ其實相同キモノ亦少カラサルヘシト雖モ其
 種目ノ多クシテ徵收ノ煩ナルハ實ニ察スヘキナリ故ニ明治八年二月
 布告第...以テ從來雜稅所稱スルモノヲ悉ク廢止シ唯收稅セザレバ營業
 管理ニ支障スル者ハ地方官於テ改テ賦稅スルコトヲ允許セリ是レ於テ
 從來雜稅種目ヲ以テ徵收スル所ノ廢止ハ廢止ニ歸シタリ
 因テ尙舊稅種目ヲ請給地租等舊稅ハ煩ニ置クコトナラ

省令根據有テ舊稅所稱雜稅其舊稅ノ精華ヲモテ之ヲ附屬セシメ
 其名稱亦亦...
 國稅ノ上置ル於テ之ヲ賦稅トシテ之ヲ三代賣糖元慶二年河内
 國本氣ノ御酒米六十五斛ヲ賣進スルニ基ヘシテ賣糖元是レ朝廷
 庶民ノ御酒ノ料トシテ米ヲ賣進スルコト能ハサルコトヲ兩方權ノニ
 シテ國稅ノ酒稅ニ非ズ然レバ鎌倉幕府ノ時ニ成リタル式目新篇追加
 シ見ルニ酒稅ハ往古ヨリ課スル所ナリトアリ然レハ即鎌倉以前已ニ
 酒稅ノ賦課ナリト知ルヘキナリ而シテ鎌倉時代ニ於テハ酒ハ米穀ヲ
 酒稅スルコト以テ徵收ノ權販賣スルコトヲ禁シ唯自家用料トシテ一
 一賣許スルコト性ヲ立テ然レバ酒ノ需要益多ク之ヲ造ルルモノ
 益増シ後醍醐天皇元德三年ニ京洛近日專ク利潤ヲ事トシ社康ノ業頗
 々盛ニシテ酒類賣買宜ク進歩ヲ進ヒ米穀一賣(即チ一俵)ヲ云フ一俵

宜請將五斗酒(原)酒釀一斛充之。一、嚴制守守。永夕遠隔。二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

宜請將五斗酒(原)酒釀一斛充之。一、嚴制守守。永夕遠隔。二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

普通營業稅ハ酒もどヲ製造スル者ニ課スル税ナリ明治六年初メ之ヲ
 行ニ入年酒税規則制定ノ時之ヲ廢止セ十三年ノ通稅則改正ノ時更ニ
 此稅則制定タリ酒類稅率念重キヨリ自釀スル者念多クサレ得ル故ニ
 之ヲ釀セザル酒類稅率念重キヨリ自釀スル者念多クサレ得ル故ニ
 釀造者自釀スル者モ多ク加ヘ其自釀者ノ販賣ノ利益亦營ルルニ
 必細多クシ以テ此後改定サレテ製造第一ノ所付金五十
 圓餘額收メ其收入高ハ管工年總算ニ課セハ二萬六千餘圓ナリ
 舊稅則中舊幕府ノ時酒類稅則其額金ヲ徵收セリ但株數定メテ
 海軍省額課金者ニ別置セ得ルハ非キ也出願者トシテ例
 額課金徵收地方ノ飲メ其額ヲ具ヘシテ明治元年醬油造高百石ニ付算
 額課金徵收額定額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額
 額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額

課金

付金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額
 課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額
 課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額

課金

然ルレバ酒類及年ト酒種管油ハ我國人民ノ必要物品ニシテ之ニ向テ課
 稅ニ對シテ宜シキ得且其收入高甚少ナリ以テ廢スルニ加カスト爲レ
 廢止ノ案ノ付ノ日ニシテ十八年ノ課金規則ヲ設ケテ再ヒ之ヲ
 課金規則制定スルニシテ明治八年五月第拾號布告ニシテ其稅則ニ依
 據シテ釀造者ノ營業稅トシテ其釀造場ナリ所ニ付金五圓課石稅トシ
 不課金高ナリ付金十圓ノ納メサレ得ル之ニ徵收スルニ當リ釀造者
 高課金課金ノ酒類稅則ニ附キ其額金ヲ課セザリ廿一年六月第拾號
 布告ニ依リ酒類稅則ニ改正セシメ釀造者ノ稅率ハ變更セザル價管油造
 課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額課金徵收額

租稅論

二百八十七

事二條... 明治十九年... 各省... 稅收... 金... 五... 一...

明治... 稅收... 金... 五... 一...

多免除ノ支店若クハ呼賣ヲ爲セキノ中營業稅支店其ノ之ヲ免除
 又キキ營業不稅額爲高計五十二萬算其價レハ五十八萬三千餘圓ナ
 實業稅明治十五年第五十一號布告ニ以テ定ムル所ナリ其法賣業ノ
 代價ニ從キテ稅率ヲ定メ印紙ヲ以テ課稅ス其稅率左ノ如ク
 一 定額十圓以下ノ者 印稅一圓
 二 定額十圓以上ノ者 印稅二圓
 三 定額三十圓以上ノ者 印稅三圓
 四 定額五十圓以上ノ者 印稅五圓
 五 定額十圓以上ノ者 印稅一圓
 其稅率及價目其ノ在學數算キ使ハレ四十萬二千餘圓ナリ
 北海運務廳爲ニ國稅徵收課稅者有テ廢止其法改正一カラスト雖モ

實業

其ノ中北海運務廳無事ニ應天層發以現品ノ課稅未賦稅ノ中ノ價額
 課稅正金ノ其海運廳課稅及現稅減價律ノ明治二十年勅令第六號
 以テ其課稅及現稅正金ノ北海運務廳則應納ナリ此稅則ニ依リテ水産
 物ノ課稅分カテ第一類ノ生魚及包合類第二類ノ乾魚鹽魚及海草ヲ包合
 第二類營業者大ニテ包合ノ課稅未賦稅正金トシテ其課稅者ハ必其課
 稅正金及現稅正金ノ其各包合水産物產出高百分ノ五ヲ以テ其包合ノ
 價年率課稅率算出シ之ヲ包合内ノ各營業人ニ賦課ス其稅額算出ノ意海
 運三十二年勅令水産物產出高算率平均ノ知事有年間北海運務廳課稅品
 課下ノ課稅率平均ノ其價額ヲ定メ以テ之ヲ算出スルナリ但
 本廳地方北海運務廳全部及ハ其幾分ニ於テ水産物既定ノ價額不相當
 形事課稅者賦稅率算出ニ賦課往玉領廳形產出高算其賣買相場及平均地
 價及課稅率算出ニ得ルナリ其稅收入高ハ廿二年課算ニ依レハ貳拾

課稅

租稅論

二卷六十二

費六千餘圓ナリ、...
右諸税項下凡種ノ税ハ我國ノ内國產消費税ト稱スルナリ此外
船隻車荷會社船隻等數種ノ税アリ
...
船隻ノ運送資費ノ多ク、後隨關天幕ノ時關稅ヨリ増シ船隻運送資費
加付船隻運送資費ニ運送ノ船隻運送資費ノ增シ船隻運送資費
...
五、...
...
...
...

六十五

其長短ハ計三間未満ノモノハ税金二十錢三間以上一問ヲ加アル
每二十五錢ヲ増課ス其後明治十六年ニ至リ第十三號布告ヲ以テ船税
規則ヲ制定ス其税率ハ燕洩船風帆船ハ舊ノ如ク五十五石以上ノ
船税ハ其税率ヲ百石ニ付二圓ト爲メタリ五十石以下ノ小船ハ遊船ト
其他ノ船ト別テ遊船ハ長サ三間ヲテ五十錢三間以上一問ヲ加フル
毎二十五錢ヲ増課シ其他ノ船ハ長サ三間ヲテ三十錢三間以上一問
ヲ加メ每二十五錢ヲ増課ス其收入高ハ廿二年豫算ニ依レハ二十五
萬七千余圓ナリ
車税ハ德川時代ヨリ行フ所ナリ然レモ江戸ノミニ限リ他ノ他方ニ於
テハ之ヲ行ハサルカ如シ維新以後明治八年ニ至リ第二十七號布告ヲ
以テ車税規則ヲ定メ馬車人力車荷車皆其税ヲ課ス馬車ハ一匹立二圓
二匹立三圓人力車二人乗二圓一人乗一圓ナリ荷積馬車牛車ハ一圓其

租稅論

二百九十五

他大八車等荷積車ハ一圓及五十錢ノ二種トス其収入高ハ廿二年豫算五十六萬余圓ナリ

右二種ノ税ハ財産ニ賦課スル税ト云フヘシ

米商會所税ハ明治八年株式取引所税國立銀行税ハ明治十一年ヨリ行フ所ナリ米商會所税株式取引所税ハ爾來數回ノ變更アリテ現行ノ税則ハ明治十八年第三十八號布告ヲ以テ制定スル所ニシテ米商會所ハ米穀定期賣買ニ付双方ヨリ其代金高千分ノ二ヲ収メ廿一年勅令第七十五號ヲ以テ萬分ノ六ニ改ム株式取引所ハ公債証券定期賣買ニ付双方ヨリ其代金高萬分ノ三諸株式定期賣買ニ付其代金高萬分ノ六ヲ収ム銀行税ハ銀行紙幣政府ヨリ下附萬千分ノ七ヲ収ムルナリ其収入高廿二年豫算ニ依レハ米商會所税ハ六萬九千余圓株式取引所税ハ九萬余圓國立銀行税ハ二十二萬一千余圓ナリ

牛馬賣買免許税ハ徳川時代ニ於テハ家株冥加或ハ雜駒運上ト稱シテ徵收スル所ニ始ル然レモ當時一境一隅ニ止マリ全國ニ行フニ非ス明治元年家株ヲ廢シ鑑札ヲ交付シテ冥加金ヲ徵收ス然レモ猶關東諸州ニ行フノミニシテ未ダ全國ニ行ハス明治三年以來全國ニ行ハシメ明治四年冥加金ヲ一圓ト爲シ明治五年規則ヲ制定シ始テ免許税ト稱スルニ至レリ其法中馬七匹ヲ一鼻綱ト爲シ一鼻綱毎ニ鑑札一枚ヲ交付シ鑑札一枚毎ニ免許税一圓ヲ徵收スルナリ故ニ此税ハ其賣買セントスル牛馬ノ數ニ應ヂテ課税スルモノナリ其収入高ハ廿二年豫算ニ依レハ六萬九千余圓ナリ

鑛山税ハ曩昔之ヲ行フタルコトアルヲ聞カス豐臣氏ノ時諸國ノ金山鑛山ヨリ運上ヲ納メシメタルコトアリ徳川氏ノ時ニ於テハ多クハ自ラ之ヲ領シ官吏ヲ派シテ之ヲ採掘セシム銅鐵等ニ至テハ之ヲ問ハス

諸藩ノ採掘スルニ任セリ明治初年ニ於テ年期納金ノ法ヲ用ヒ一年採
 獲スル所ノ多寡ヲ豫算シ年期中定額運上ヲ納メシム明治六年七月第
 二百五十九號布告ヲ以テ始テ日本坑法ヲ制定シ坑物借區ノ二稅ヲ行
 フ鑛物稅ハ其採取セシ所ノ金屬其他諸坑物ノ代價百分三以上百分ノ
 二十ヲ収メ借區稅ハ鑛山ヲ區畫シ營業人ニ貸付シ其面積ニ從テ賦課
 スルモノニシテ鉄ヲ除キ凡テ鑛質ナル坑物ヲ採取スル坑區ハ面積五
 百坪母ニ金一圓ヲ課シ鑛其他鑛質ナキ坑物ヲ採取スル坑區ハ面積五
 百坪母ニ金五十錢ヲ課ス明治八年第二號布告ヲ以テ坑物稅ヲ廢セリ
 故ニ今日鑛由ヨリ収入スル租稅ハ唯借區稅アルノニ其収入高廿二年
 豫算ニ依レハ金三萬餘圓トス

鐵道免許稅ハ德川氏ノ時鉄道役成ハ鉄砲運上ト稱シ所在適宜ニ徵収
 スル所ヲ明治三年鐵道稅ト稱シ五年始テ鐵道免許稅ト稱ス明治

六十九

六十九

六年鐵道規則ヲ制定シ遊藝園ノ區別ヲ立テ稅率ヲ定ム爾來其規
 則ヲ改正スルニト數回ニ及リト雖モ稅率ハ之ヲ改メテ遊藝園ハ金十圓
 遊藝園ハ金一圓トス其収入高ハ廿二年豫算ニ依レハ五萬六千餘圓トノ
 度量衡稅ハ德川氏ノ時之ヲ行フタルヲ開カス明治八年度量衡取締切
 則ノ設アルニ及テ始テ之ヲ行フ其法度量衡三器ノ製作材料一等規
 費用ヲ製作品ニ割合ヒ以テ各品ノ原價ト爲シ之ニ其二割四分ヲ加ヘ
 テ賣價ト爲シ其二割四分ノ一分ヲ稅率ト爲スナリ其収入高ハ廿二年
 豫算ニ依レハ二千二百餘圓ナリ

第十三章 地方稅

地方稅ノ事一國財政ニ於テ輕カラサル關係ヲ有スルモノニシテ財政
 學中亦忽諸ニ付スヘカラサル一諸題タリ前數篇ニ於テハ主トシテ國
 稅ヲ論ゼタルヲ以テ今ヤ地方稅ノ大略ヲ論ゼシ

租稅論

各國地方税ノ良法ヲ得ルハ頗難シトスル所ニシテ未タ標準ト爲スヘキモノアルヲ見ス佛國ノ入市税ノ如キ英國ノ地方直税ノ重キカ如キ皆財政學者ノ苦心改良セント欲シテ未タ良法ヲ得サル所ナリ我國ノ如キモ其方法未タ宜キヲ得タリト謂フヘカラスシテ將來益改良ヲ謀カラサルヘカラサルナリ

歐洲諸國ニ於テハ地方ノ賦課スルヲ得ヘキ物件ヲ定メ重ニ直税ヲ課セシメ或ハ地方所有地ノ収入或ハ用水瓦斯等ノ特占權ノ収入ヲ以テ其費用ヲ辯セシムルヲ常トス蓋シ中央政府ハ各國ヲ統治スルモノニシテ能ク全國一般ノ形情ヲ遠觀シテ公平ヲ得可キノ地位ニ居ルモノナリ故ニ地方税ノ徵收權ヲ制限シ或ハ課税物件ヲ定ムルカ如キハ其能ク爲スヲ得ヘキ所ニシテ之ヲ地方ニ放任シテ敢テ顧ミサルトキハ各地方隨意ニ其地方税ヲ徵收シ大ニ公平ヲ失スルノミナラス人民

ノ不便ヲ被ムル亦少カラサルヘキナリ

地方ノ費用ハ之ヲ直税ニ資ル是レ各國ノ通例ナリ佛國ニ於テハ地方税ハ國税中ノ直税四種即チ地稅、分領及動產稅、憲戶稅、營業稅ノ副稅ト爲ス副稅トハ即チ主稅ニ添附シテ徵收スル租稅ニシテ中央政府ニ徵收スル租稅ノ添付稅ナリ此方法ヲ以テ地方税ヲ徵收スルトキハ頗簡易ニシテ手數ヲ省クコト少カラス蓋シ國稅ヲ徵收スルト同時ニ他方税ヲ徵收スルヲ得可ク仮令同時ニ之ヲ徵收セサルモ收稅官吏ハ兩稅ヲ兼司ル可ク收稅原簿モ兼用フルコトヲ得レハナリ然レモ國稅賦課ノ基礎眞ニ正且平ナレハ則此副稅ノ法ヲ用フルハ甚良シト雖モ若シ國稅賦課ノ基礎正平ナラザルトキハ國稅ノ徵收己ニ均平ナルヲ能ハサルニ加フルニ地方税ノ賦課又隨テ均平ナラザルヨリ其弊害實ニ堪フヘカラサルニ至ルモ知ル可カラサルナリ

佛國地方ノ副稅ハ法律ニ於テ賦課ノ範圍ヲ定メ其範圍内ニ於テ各地
 方議會ハ之ヲ増減スルコトヲ得ルノ權アリテ地方費用ノ多寡ニ應
 テ其徵收ノ多寡ヲ議決シ中央政府ノ收稅官之ヲ徵收ス而シテ佛國ノ
 地方議會ハ法律ニ於テ定ムル所ノ外別ニ直稅ヲ設クルコトヲ得ラ
 ナリ故ニ佛國ノ直稅ノ法ハ畫一ニシテ國稅地方稅共ニ其性質ヲ同ク
 シテ其賦課ノ率相異ナルノミ是ヲ以テ各地方ノ隨意ニ不規則ナル稅
 法ヲ設クルカ如キハ曾テ見サル所ナリ

英國ハ則然ラス其地方稅ハ或ハ郡稅邑稅若クハ救貧稅ト稱シ皆直稅
 ナリト雖モ中央政府ノ徵收スル地稅若クハ家屋稅ト相聯絡スルモノ
 ニ非ズシテ地方各其稅ヲ設クルコトヲ得ルナリ而シテ其徵收モ地方
 ノ官吏之ヲ司リ中央政府ノ干與スル所ニ非ス故ニ其徵收ノ方法等之
 ヲ佛國ニ比スルハ極難ナラサルコトヲ得サルナリ

米州合衆國ノ如キモ亦英國ト略相似テ地方ノ稅法ハ地方自ラ之ヲ設
 クルコトヲ得ルナリ

地方稅ノ法英佛相異ナル是ノ如シ而シテ孰ヲ可トシ孰ヲ不可トスル
 ヤ亦多少ノ論ナキニ非サルナリ夫レ地方ノ自治ヲ重スルノ點ヨリ論
 スレハ則英國ノ制尤モ可ナリ英國ノ制ニ從ヘハ中央政府ハ地方稅法
 ニ於テハ殆ト干渉スル所ナクシテ之ヲ地方ノ自治ニ一任ス故ニ地方
 ニ於テハ各稅法ノ得失ヲ考量シ而シテ其得トスル所ノモノヲ採テ之
 ヲ行フコトヲ得可シ是ヲ以テ地方ノ勢力大ニ發達スルヲ期スヘキナ
 リ然レモ其弊ニ至テハ則複雜煩雜ニ流レ地方ノ財政或ハ紊亂セサル
 コトヲ保ツ可カラサルナリ

佛國ノ制ニ從ヘハ國稅中ノ直稅ニ附加スルニ地方ノ情況ニ應シテ增
 減スルコトヲ得可キ副稅ヲ以テスルカ故ニ會計ノ法自ラ畫一ニシテ

中央政府ノ兼テ之カ徴収ヲ兼掌ルヲ以テ會計検査院其會計ヲ検査シ其不正ヲ正スヘシ是ヲ以テ地方財務紊乱ノ端ヲ防クコトヲ得可キナリ然レモ其法畫一ニシテ硬剛ナルヲ以テ地方ノ情況ニ應シテ張弛屈伸シテ其宜キニ適スルコト能ハサルノ憾ナキヲ得スシテ地方ノ人民精思熟慮シテ其尤モ可トスル所ノ税法ヲ擇フコト能ハス故ニ地方自治ヲ重スルノ點ヨリ論スルトキハ佛國ノ制ハ英國ノ爲メニ一步ヲ讓ラサルヲ得サルヘシ然レモ地方財務畫一ニシテ簡易明断ナルヲ尙フノ點ヨリ論スレハ則佛國ノ制大ニ英國ノ制ニ優ルモノアルナリ右論スル所ヲ以テ視レハ則兩制各得失ナキニ非サルナリ故ニ若シ之ヲ折衷シテ其互ニ優ル所ヲ兼採リテ其弊ヲ去ルコトヲ得ハ則尤モ良法ト爲スナリ而シテ其優ル所ヲ兼採リテ其弊ヲ去ルハ他ナシ法律ヲ以テ地方税目ヲ一定シ而シテ地方ノ情況相異ナルモノアリテ一定

法ニ從フヲ能ハサルトキハ特ニ法律所定以外ノ租税ヲ徴収スルコトヲ許スニアルナリ

我國地方税ハ法律ヲ以テ地租割營業並雜種税及戸數割ノ三種ト定、故ニ稍佛國ノ制ニ似タルモノアリ然レモ營業税ハ商業工業ニ賦課、ルモノニシテ其範圍甚廣ク且雜種税ハ之ヲ賦課スルヲ得ヘキモノ、十種ニ下ラス加フルニ府縣知事ハ府縣會ノ決議ヲ以テ其課税ノ種目ヲ取捨スルコトヲ得ルノミナラス府縣會ノ決議ヲ經テ府縣知事ヨリ内務大臣ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ受クレハ特別課税ヲ爲スコトヲ得可シ故ニ地租割ヲ除クノ外ハ各府縣隨意ニ租税ヲ廢設スルコトヲ得可シ而シテ地方税規則ニ依レハ其課税ノ範圍ナキニ非スト雖モ其範圍甚廣キヲ以テ地方課税ノ自由ヲ制限スルコト嚴ナラサルナリ又市制町村制ニ依ルモ國稅府縣稅ノ附加稅及直接又ハ間接ノ特別稅

ハ之ヲ徴収スルノ權アリテ亦大ニ其課税ノ自由ヲ束縛セス是ヲ以テ
 我國ノ地方税法ハ蓋シ英佛兩制ヲ折衷シタルモノト謂フヘキナリ
 又外國ニ於テハ其費途ヲ以テ税目ト爲シ其徴収スル所ノ租税ハ特ニ
 其費途ニ供スルコトヲ示スモノナリ即チ敷石税瓦斯税掃除税ノ如キ
 是レナリ此等ハ市街ノ敷石瓦斯燈及街路ノ掃除ノ費途ニ供スルノ税
 ナリ故ニ其敷石税トシテ徴収スル所ハ專ラ之ヲ敷石ノ費用ニ供シ瓦
 斯税トシテ徴収スル所ハ瓦斯燈ノ費用ニ供シ彼此互ニ流用スルコト
 許サレハ濫費ノ弊ヲ防クヲ得可ク且納税者チシテ其納ムル所果
 テ何ノ費用ニ供スルヤチ明知セシムルヲ得可シ故ニ多少ノ効益ナ
 ト云フヘカラスト雖也然レ此方法ニ依ルトキハ租税ヲ賦課スルノ
 主義ニ背クコトナキヲ得サルナリ蓋シ租税ハ必シモ各人享クル所ノ
 利益ニ比例スヘキモノニ非ス然ルニ今此方法ニ依リ税目ヲ稱スルニ

其費途ノ名ヲ以テスルトキハ敷石瓦斯掃除水道等各人ノ享クル所ノ
 利益ノ多少ニ應セサル可カラサルヘシ若シ果シテ是ノ如クナラサル
 ヘカラサルトキハ其徴収ノ方法煩密ニ涉リ到底實際ニ行フコト能ハ
 サラン故ニ此方法ニ依リテ地方税ヲ設クルモ實際各人享クル所ノ利
 益ノ多少ニ應シテ租税ヲ課スルコト能ハス縱令能ク其利益ノ多少ニ
 應シテ賦課スルコトヲ得ルモ租税ハ人民カ享クル所ノ利益ニ報酬ス
 ル所以ニ非サルヲ以テ必シモ此方法ニ依ルコトヲ須ヒサレナリ此方
 法ハ主トシテ英國ニ行ハル、所ニシテ其由來久シ然レモ今日ニ於テ
 ハ漸ク之ヲ廢セリ是レ租税ヲ賦課スルノ主義ニ悖ルノミナラス其真
 大ナル効益ナキヲ以テナリ
 我國ニ於テモ東京市區改正法ニ依リ特別税ヲ設ケ專ラ市區改正費用
 ニ供セシム是其費途ヲ指定シテ特ニ徴収スルモノナレハ猶カノ敷石

税若クハ瓦斯税トシテ徴スルモノニ異ナラス但東京府ノ特別税ハ純然タル地方税ト云フヘカラサルカ如キナリ蓋シ市區改正ノ事業タル各地方普通ニ行フヲ得可キモノニ非スシテ特ニ東京府ニ限リテ之ヲ行ハシムルノミ故ニ之カ費用ニ供スル租税ハ通常ノ地方税ト全視スルコト能ハサルナリ

右論スル所ノ租税ノ外夫役ヲ課スルモノアリ亦一種ノ租税ト云ハサレヲ得ス夫役ハ歐洲諸國ニ於テ行フ所少カラス我國封建ノ時代ニ於テモ夫役ヲ徴スルコト所在皆然リ維新以來之ヲ廢セリト雖モ地方ニ於テハ地方税ヲ納ムルニ代テ自ラ出役センコトヲ望ムモノナキニ非スシテ此等ハ之ヲ許シテ其役ニ服セシムルノ例アリ市制町村制ニ於テハ夫役ヲ課スルコトヲ許シ市町村ニ於テ公共ノ事業ヲ起シ又ハ公共ノ安寧ヲ維持スルカ爲メニハ夫役ヲ課スルコトヲ得ルナリ市制第

百一條町村制第百一條(佛國ニ於テモ封建時代ヨリ革命ノ時ニ至ルニテ到ル處夫役ノ賦課アラサルナシ而シテ革命ノ時ニ至リ其不正濫弊アルヲ以テ之ヲ廢セリト雖モ其後久シカラス各地方舊來ノ慣例ヲ因襲シテ再ヒ夫役ヲ賦課スルニ至レリ然レモ夫役ノ法タル適當ノ制限ヲ加ヘサレハ則濫弊ヲ生シ易シ故ニ千八百三十年ニ至リ法律ヲ設ケ其制限ヲ定メ夫役ヲ賦課スルハ市區ノ經常歲入以テ道路ノ修繕ヲ爲スニ不足ヲ生スルトキニ限ルト爲シ其場合ニ於テ一年ニ三日間夫役ヲ課スルコトヲ得セシム此ニ依リ市邑内ニ住居スル健全ナル男子齡十八年以上六十年以下ノ者及荷車馬車駄牛馬乘馬輓車牛馬ハ皆夫役ノ賦課ニ應セサルヘカラス而シテ夫役ヲ賦課セラレタル者自ラ其役ニ服スルコトヲ欲セサルトキハ代フルニ金ヲ以テスルコトヲ得ルナリ故ニ毎年縣會ハ縣内市邑人馬車ノ一日役ニ相當スル代價ヲ定メ被

役者ハ一定ノ猶豫期限内ニ自ラ夫役ニ應スルコトヲ申立テサルトキハ代金ヲ以テ納ムルモノト看做スナリ

我邦市町村制ニ於テハ夫役ヲ課スルコトヲ許スノミニシテ之ヲ賦課スルニ果シテ何等ノ方法ヲ以テスヘキヤハ法律ニ於テ之ヲ定メス故ニ更ニ法律ヲ以テ其賦課ノ法ヲ定メサルトキハ則市町村會之ヲ定ムルニ當テハ尤モ細思精慮シテ其法ヲ設ケスハ或ハ人民ノ疾苦ヲ醸スナキヲ保ツヘカラサルナリ

夫役ノ法ハ之ヲ繁華熱鬧ノ市街ニ施スハ或ハ人民ノ疾苦ヲ招クコトナキニ非サルヘシト雖モ地方ノ町村ニ於テ之ヲ行フハ地方税金ヲ徵收スルニ比スレハ大ニ便ナルコトナキニ非ス殊ニ農民ノ如キハ終年田圃ニ出テ、力役スルモノニ非サルヲ以テ農間ノ時ニ當リテ道路ノ修繕ノ如キ提防橋梁等ノ工事ニ於テ夫役ヲ課スルハ其尤モ便トスル

所キテ修繕ニ當リテ其道路ノ能ク開通シテ修繕ノ能ク到ルハ實ニ夫役ヲ課課ニ行フニ由ルニ云ヘシ

夫役ノ法ハ之ヲ繁華熱鬧ノ市街ニ施スハ或ハ人民ノ疾苦ヲ招クコトナキニ非サルヘシト雖モ地方ノ町村ニ於テ之ヲ行フハ地方税金ヲ徵收スルニ比スレハ大ニ便ナルコトナキニ非ス殊ニ農民ノ如キハ終年田圃ニ出テ、力役スルモノニ非サルヲ以テ農間ノ時ニ當リテ道路ノ修繕ノ如キ提防橋梁等ノ工事ニ於テ夫役ヲ課スルハ其尤モ便トスル

所キテ修繕ニ當リテ其道路ノ能ク開通シテ修繕ノ能ク到ルハ實ニ夫役ヲ課課ニ行フニ由ルニ云ヘシ

夫役ノ法ハ之ヲ繁華熱鬧ノ市街ニ施スハ或ハ人民ノ疾苦ヲ招クコトナキニ非サルヘシト雖モ地方ノ町村ニ於テ之ヲ行フハ地方税金ヲ徵收スルニ比スレハ大ニ便ナルコトナキニ非ス殊ニ農民ノ如キハ終年田圃ニ出テ、力役スルモノニ非サルヲ以テ農間ノ時ニ當リテ道路ノ修繕ノ如キ提防橋梁等ノ工事ニ於テ夫役ヲ課スルハ其尤モ便トスル

所キテ修繕ニ當リテ其道路ノ能ク開通シテ修繕ノ能ク到ルハ實ニ夫役ヲ課課ニ行フニ由ルニ云ヘシ

夫役ノ法ハ之ヲ繁華熱鬧ノ市街ニ施スハ或ハ人民ノ疾苦ヲ招クコトナキニ非サルヘシト雖モ地方ノ町村ニ於テ之ヲ行フハ地方税金ヲ徵收スルニ比スレハ大ニ便ナルコトナキニ非ス殊ニ農民ノ如キハ終年田圃ニ出テ、力役スルモノニ非サルヲ以テ農間ノ時ニ當リテ道路ノ修繕ノ如キ提防橋梁等ノ工事ニ於テ夫役ヲ課スルハ其尤モ便トスル

利タル國ヨリ論スルヲ待タサルナリ且夫役ノ法ハ必シモ身自ラ勞力ニ服スルコトヲ要スルニ非ス金錢ニ豊カナルモノハ之ヲ出シテ以テ勞力ニ代フルコトヲ許ス故ニ人民金錢ニ豊カナルニ至レハ自然自ラ勞力ニ服スルコトヲ爲サス金錢ヲ以テ之ニ代フルニ至ルハクヤテ決シテ不便アルコトヲ觀サルナリ唯其工事稍久シキニ彌ルノ恐ナキニ非スニ雖モ空ヲ消セシトスル時日ヲ以テ之ヲ營ムモノナレハ亦未ク深ク重トスルニ足ラサルナリ

今歐洲大陸殊ニ佛國ニ行ハル、地方税ノ一種ニシテ最モ世ノ非難ヲ免レサルモノハ入市税ト爲ス入市税ハ市邑ニ關門ヲ設ケ市邑外ヨリ物賣ヲ市邑ニ輸入スルモノニ課スル租税ニシテ佛國ニ關稅ヲ徵收スルト異ナルコトナキナリ佛國ノ入市税ハ由來其久クシテ往昔ニ於テ國王ハ市邑ノ入市税ヲ得テ其收入ノ半額ヲ徵收スルコト

百十四

百十五

通例ニシテ第拾九世紀ノ始ニ於テハ入市税ノ純收入額十分中一ヲ以テ國庫ニ納ムルモノモシテ千八百五十二年ニ至テ之ヲ國庫ニ納ムルモノモシテ千八百五十二年ニ於テハ今日猶入市税收入三分ノ一ヲ入市税ハ中央政府カ特ニ市邑ニ權力ヲ附與シテ之ヲ徵收スルコトヲ許シタルモノモシテ市邑ハ其特許ヲ得ルニ非サレハ決シテ之ヲ徵收スルコトヲ得ザルナリ佛國ニ於テハ市區ヨリ許願スルコトヲ得ル事由ヲ審査シ而シテ其許サハルコトヲ得タル理由アルモノハ之ヲ許ス其現ニ許サレテ入市税ヲ行フ市邑ハ千五百以上ニ至リ其一年收入スル所總計貳倍ニ達シテ止ニ出シ稅額ニ於テモ總計東京市區改正ノ事未發表スルニ當リテハ東京區入市税額ヲ行フノ議アリト聞ケリ然レモ入市税ヲ行ハントスルトモハ楯垣ノ類ヲ以テ市ノ周圍ニ施シテ其外ヲ關門

租稅論

三十二

ヲ設ケテ市ニ入ル貨物ヲ檢セタルヘカラスカ人佛國ノ巴運其他市邑ニ於テハ市ノ周圍ハ城壁ヲ廻シ通行必其門ニ由ラサルヘカサルヲ以テ其出入ヲ監察スルコト難カラズ然ルニ我東京ニ於テハ四方廓開シテ處トシテ出入スヘカフナルナシ故ニ到底行フ可カラサルヲ以テ議終ル地ニタリト云ヘリ

入市税ハ貨物ノ運轉交易ヲ妨ケルコト少カラスシテ内國商業ノ害ヲ爲スハ多辯ヲ待チスルニ未明カカリ故ニ己ムヲ得サルノ時ニ非サレヨ夫レ決シテ之ニ許スヘカラス是等以テ佛國等ニ於テ之ヲ許ストキハ必ス其課税スルニトテ得可キ物品ヲ制限シテ僅ニ課税スルコトヲ許サレナリ

入市税ヲ課課スルハ必單ニ市邑ノ歳入ヲ得ルノ目的ニ出ツルモノニ限リ決シテ保護税ニ性質ヲ有セシムヘキニ非ス然レモ或ハ市内ノ職

課税

課税

業ヲ保護スルノ精神ヲ以テ課税ノ法ヲ立ツルモノナキニ非ス是レ入入市税ノ主意ニ背ルモノナリハ中央政府ハ必ス之ヲ許スヘカラス

入市税ハ内國商業ノ害ヲ爲ス少カラケルヲ以テ之ヲ廢スヘキコトヲ論スル者少シ然レモ其國等諸市邑ニ於テ今日猶之ヲ行フモノ多ク商業ノ之ヲ廢シントスルトキハ他ニ其收入ニ代ルヘキ税源ヲ求メテ之ヘカラス課ルニ入市税ノ收入少カラスシテ他ニ能ク之ニ代ルル是等ハキ税源ヲ得サルニ由ルナリ獨リ白耳義ニ於テハ斷然之ヲ廢スルコトヲ決行セリ即チ千八百六十年七月十八日發布ノ法律ニ曰ク入市税ト稱スル間接税ハ自今總テ廢止シ再世設クルコトヲ禁ズ而シテ中央政府ハ收入ニ對シテ酒稅砂糖稅等ヲ増加シテ其收入ヲシテ各色入市税ノ收入平均額ニ均シカラシメ爾シテ其増加シタル收入ヲ以テ

租稅論

課税

各市邑ニ分配スルノ法ヲ立テタリ其分配ノ割合ハ各市邑人民ヨリ政
 府ニ賦入スル直税額ニ比例シテ之ヲ定ム故ニ白耳義ノ此改正ハ舊來
 各市邑ニ於テ徵收スル租稅ヲ中央政府代テ徵收シ而シテ之ヲ各市邑
 ニ分配スルニ異ナラザルナリ是ヲ以テ入市稅廢止ノ爲メキ人民ノ負
 擔減輕セシメテ非ナラザリ然レモ各市邑關門ヲ設テ出入ノ貨物ヲ檢
 シ以テ之レニ課稅スルノ煩ヲ去ルコトヲ得テ其貨物ノ運轉交易ヲ便
 捷ニ商業ノ發達ヲ除クテ又其利益亦尠少ナラザルナリ我國ノ如
 此未決入市稅ノ法ヲ不決ニシテ其利害ヲ論議スルハ必ヨク緊要ト
 其市邑ノ内線所屬東部ニ入市稅ヲ行スル議已ニ幾日モ出テタリ此後
 市制町村制已ニ行ハレタル日ニ至リテ亦必スシモ其議ノ出ツルコト
 士大市制又主事ヲス故テ略其良法ニ非ナルコトヲ論シ並ニ其改正法
 其下制事案ニ於テ附屬ヲ以テ之ヲ論シ其議ノ出ツルコトヲ期ス

我日本ニ於テ地租稅ヲ稱シ其租稅ヲ徵收スルハ實ニ最近ニ在リト雖
 此地方費ヲ徵收シテ其全ノ事業ニ用ヒシコトハ遠ク封建時代ニ防マ
 其式明治六年地租改正條例ヲ定ムルヤ郡村入費等地所ニ課スルモノ
 其地價ノ騰貴其制地租並テノ一ト爲ス明治八年舊來雜稅ト稱ス
 其制地價ノ騰貴其制地租並テノ一ト爲ス明治八年舊來雜稅ト稱ス
 費用補償セシメテ全年此等ノ收稅及劇場藝妓等ノ諸稅賦金ト稱スルモ
 ノト改メ更ニ府縣稅トシテ之ヲ徵收スルコトヲ許シ明治十年土地ニ
 賦課スル民費並テ地租五等ノ一ニ起ユヘカラサルコトヲ定メ明治十一
 年府縣會規則及ニ地方稅規則ヲ制定スルニ及テ從來府縣稅民費ノ名
 其以テ徵收セシ租稅並テ改メテ地方稅ト稱スルコトヲナレテ明治十三
 年並テ更ニ地方稅規則ヲ改正ス其後多少ノ更改チキニ非スト雖モ
 其大體此今日ニ現行スル所ナリ

今此規則ヲ按スルニ地方税ハ分テ三種ト爲ス一ニ地租割二ニ營業並ニ雜種税三ニ戸數割是レナリ地租割ハ國稅ノ地租ニ附加シテ徵スルモノナレテ即チ副税ナリ其制限ハ十二年第四十八號布告ヲ以テ地租五分ノ一ヲ改メテ地租三分ノ一ト爲ヒリ營業税並ニ雜種税ハ法律ヲ以テ其種類及制限ヲ定メテ即チ明治十一年第三十九號布告ニ依レハ營業税ヲ分テ第一諸會社及諸卸賣商第二諸仲買商第三諸小賣商及雜商ノ三類ト爲シ其稅額ハ第一類十五圓以内第二類拾圓以内第三類五圓以内トス然レモ國稅アルモノハ之ニ課税スルコト許サレナリ雜種税ノ種目ハ其數頗ル多クシテ亦一々其稅額ヲ定限スニテ左ノ如シ

一 船車

國稅ノ半額以内

二 露市、演劇、其他諸興行、遊覽所 上、高百分ノ五以内

百二十

百二十一

三 露遊技場、玉吹、大弓、揚弓等ノ類 一年二十圓以内

四 料理屋、待合茶屋、遊船宿、芝居茶屋

五 人寄席 一年拾二圓以内

六 賣屋、問答屋、問酒店 一年十五圓以内

七 古着、古金、古道具 賣商、旅籠屋

八 飲食店、酒屋、茶屋 一年十圓以内

九 湯屋、理髮床、雇人請宿 一年五圓以内

十 遊藝師匠、遊藝人、相撲 一年十二圓以内

十一 俳優 一年六十圓以内

十二 遊園、遊技 一年四十二圓以内

十三 乘馬 一年五圓以内

十四 乘馬 一年一圓五十錢以内

租稅論

三百十九

十三 屠牛

一年一頭五十錢以内

十四 漁業、採藻稅

漁業、採藻稅ハ各地從來ノ慣例ニ依リ之ヲ徵收シ若シ其例規ニ改正シ又ハ新法ヲ創設セントスルキハ府知事縣令ヨリ内務大臣
農商務大臣ニ稟請セシム

營業稅雜種稅ノ種目右ノ如シ明治十三年之ヲ改正シ雜種稅目中ニ製造所一年十五圓以上ノ一項ヲ加ヘ乘馬一頭五十錢ヲ一圓ニ改メ屠牛トアルヲ屠畜ニ改メ又營業稅ヲ庶類ニ分チ各稅額定限ヲ設クルトモ廢止總テ十五圓以内ト改メタリ明治十五年ニ至リ更ニ之ヲ改メ營業稅ヲ商業工業ノ二種ト爲シ稅額ノ制限ヲ廢シ雜種稅ハ種類ヲ變更スル所ナシト雖モ稅額ノ制限ハ亦之ヲ廢セリ故ニ今日ニ於テハ地方稅ハ地租割ヲ除キ外營業稅ハ輕重ヲ制限スル法律ナキナリ

戶數割ハ一家ヲ構成スル戶率ニ課課スル稅トス但シ他人ノ家ニ同居シ別々一家ヲ成サシム者ニハ之ヲ課課セザルナリ故ニ此稅ハ一定ノ戶主ニ課スル人頭稅ト云フモ或ハ不可ナカルヘシ然レモ區部ニ於テ明治十三年第十二號布告ニ依リ家屋稅ヲ以テ戶數割ニ代アルコトヲ得而シテ戶數割ハ他人ノ家ヲ賃借スル者ト雖モ其賃借スル所ノ家屋稅課稅セラル、ト雖モ家屋稅ハ特ニ其家屋ノ所有主ニ課稅スルナリ

地方稅ノ稅率及徵收方法ハ地租割ヲ除クノ外各地方區々ニシテ固シ一定セサルヲ以テ今一々講スルニ違アラハ故ニ僅ニ東京府ニ行フ所ノ稅率及徵收方法ヲ舉テ其一班ヲ示サン

地方稅徵收ノ多寡ヲ定ムルハ先地方行政ノ經費ヲ算定シ而シテ地租割及戶數割若クハ家屋稅ニ課シテ徵收ヘルヲ得可キ金額其他母

外ノ収入ヲ算シ之ヲ行政經費ニ對照シ其足ラサル所ノ費用ヲ以テ
業稅雜種稅ニ資ルヲ各地方ノ通例ト爲ス蓋シ地租割、戶數割若クハ
屋稅ハ其實物ニ就テ賦課スルモノニシテ其稅率ハ每年多ク變動ス
コトヲ要セス尤モ收入豫算ヲ立ツルニ便シテ又徵收シ易キヲ以
テ

右ノ如ク經費ト收入トヲ對照シ不足スル所ノ金額ヲ算出シ以テ之
營業稅雜種稅ヨリ徵收ス其法東京府ノ例ニ從ヘハ先營業ニ使用ス
建物ト敷地ノ地位ヲ標準ト爲シ以テ箇數ヲ算出ス而シテ其箇數總
ヲ以テ必要金額ヲ除シ以テ一箇ノ率ト爲シテ賦課スルナリ其箇數并
出法ハ建物ノ廣狹ヲ定メ二階ハ壹坪ヲ七合ト爲シ三階ハ壹坪ヲ五
ト爲シ(假小屋ノ類ハ算入セズ)建物ノ種類ヲ二ニ分テ石造煉瓦土敷
ト爲シ木造ヲ三ニ分テ各業率ヲ定メ次ニ建物ノ敷地ノ等級ヲ定メ母

級業率ヲ定メ而シテ建物ノ坪數ノ建物種類ノ乘率及敷地ノ乘率ヲ乘
シ以テ箇數ヲ定ムルナリ例ヘハ

- 建物ノ坪數 五〇・〇
 - 建物種類ノ乘率 二・〇
 - 建物敷地ノ率 一四・〇
- コレヲ其式左ノ如シ

$$50 \times 2 \times 14 = 1400$$

即チ箇數千四百ヲ得ルナリ此ノ如クシテ箇數ヲ看出シ以テ徵收ス
キ金額ヲ除シ一年ノ稅率ヲ定ムルナリ是レ即營業稅ノ賦課法ナリ
雜種稅モ亦此法ヲ用リテ徵收スルモノ少カラス即チ料理屋、待合茶屋、
雜種宿、芝居茶屋、飲食店、湯屋、理髮店、雇人請宿、人寄席ノ如キ然リトス
則チ行ヒ亦此法ヲ用ヒテ其興行日數ニ應シテ課稅ス遊藝藝人、相撲、

優等ハ等級ヲ分チテ月稅若干ヲ課ス船車及ヒ水車ハ其種類ニ應ジテ
 稅額ヲ定メ乘馬屠畜ハ每一頭ニ付テ稅額ヲ定メ採藻海苔ハ海面ニ依
 級ヲ分テ面積百坪ニ付稅額ヲ定ムルナリ
 家屋稅戶數割ニ亦營業稅ト全例ニシテ箇數ヲ看出シテ以テ稅率ヲ定
 ム故ニ昨日ノ地方稅其種目頗繁多ナリト雖モ東京府ノ徵收方法ヲ以
 テ區別スレハ其類蓋シ多シトセサルナリ即チ家屋稅戶數割營業稅以
 雜種稅沖料建屋特合茶屋遊船宿芝居茶屋飲食店湯屋理髮店雇人受給
 興行(興行第三條)建物ナキモノニシテ上リ高百分ノ五ヲ稅率トスル
 寄席ハ其稅制割シカワズ其稅率モ多少ノ差ノリト雖モ皆畧相同キ
 課徵收法少用ソルモノナリ
 地方ノ收込右租稅ノ外雜收入アリ國庫下渡金アリ此等ハ租稅篇ニ於
 テ詳述スルモ其雜收入國庫下渡金ハ地方稅ヲ補助スルモノナリ今其詳

事ナシニ此レ府縣ノ警察費ニ對シテ下付スル所ニシテ廿一年八月
 勅令第六十一號ニ依リ警察費及警察廳舎建築修繕費ニ對シ東京府
 々其雜收入大勢ノ四其他ノ府縣(沖、瀨、河、縣)ニハ六分ノ一ヲ下付スルモノ
 此外警察廳官吏並ニ之ニ準ズヘキ内外國僱人ノ諸給與審視廳ノ廳費
 亦國庫ニ支給ス
 東京府ニ於テハ普通地方稅ノ外特別稅アリ此稅ハ特ニ市區改正ノ爲
 用ニ供スルモノニシテ亦一種ノ地方稅ト稱スルモ不可ナカラシ其詳
 目及課額左ノ如ク
 地租全額以內但耕地ヲ除ク
 地方稅十分ノ四以內
 全上
 區内ニ輸入又ハ區内ニ於テ製造販賣

ルモノ一石ニ付金五十錢以内

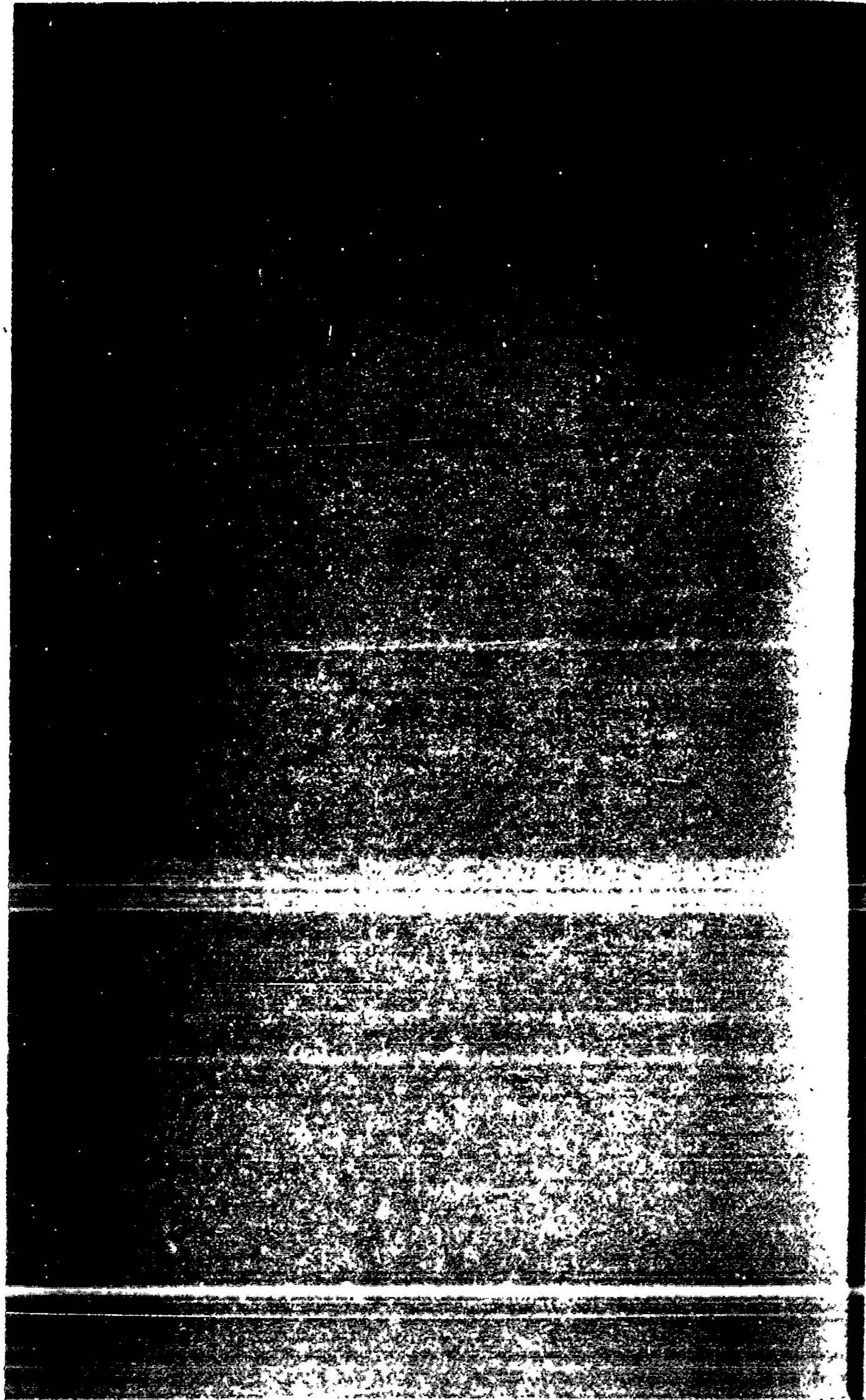
右四種ノ税ハ東京市内ニ住居スルモノ、普通地方税ノ外ニ納ムヘキ義務アルモノナリ

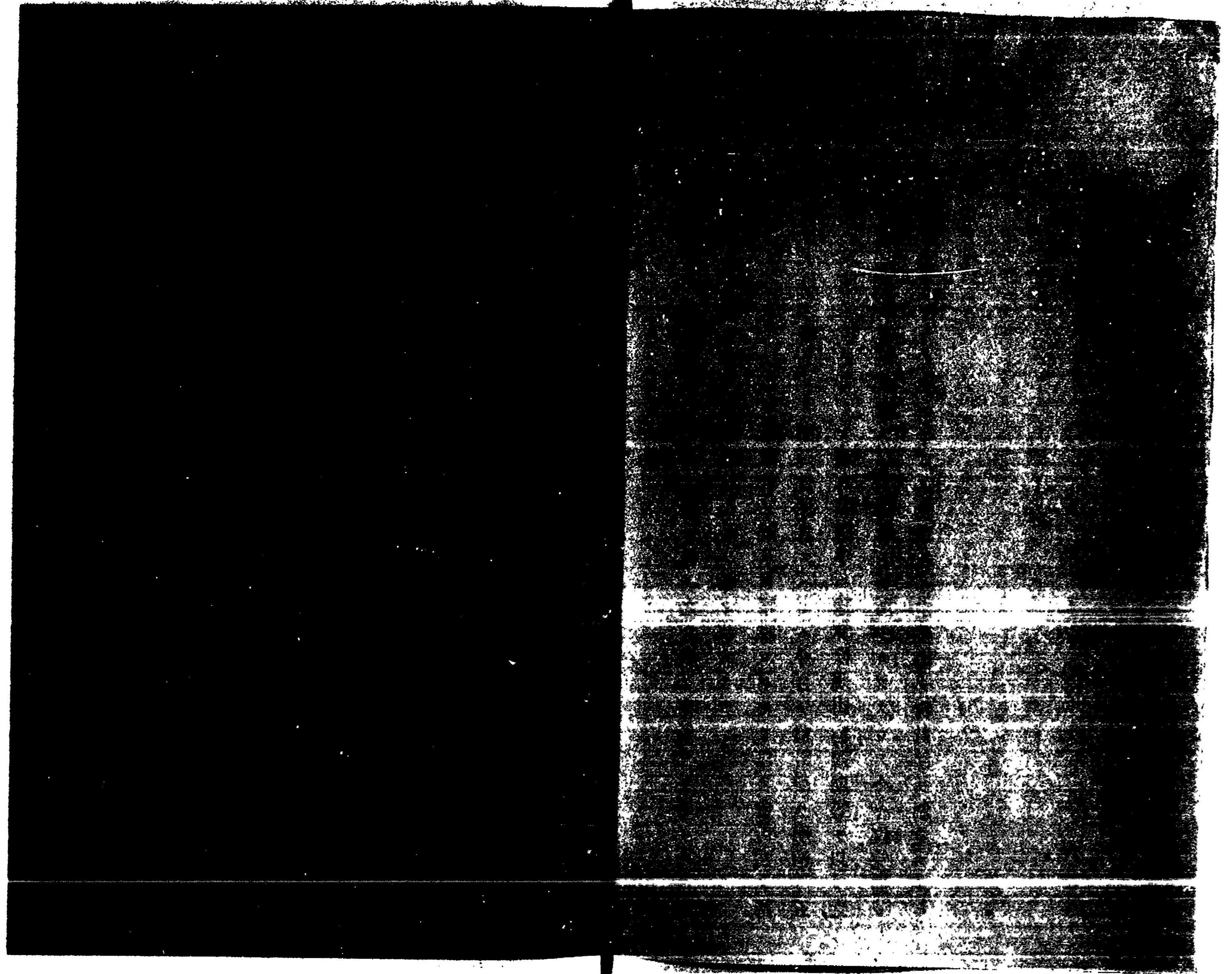
區町村費モ亦地方税ノ一種ナリ然レモ未ダ法律ヲ以テ明ニ區町村費賦課徴収ノ方法ヲ定メタルコトナレ今日各地方ノ慣例ニ依レハ普通地方税ノ副税トシテ之ヲ徴収ス其種類ヲ舉クレハ地價制、營業制、各種課戸數制、薪タハ家屋制ニシテ皆普通地方税目ニ依リテ名ヲ設ケ其徴収方法亦相同シ故ニ更ニ之ヲ贅セス

地方税徴収高二十年度ノ豫算ニ依レハ地租九百四十九萬二千二百五十二圓營業税二百九十八萬九千三百四十四圓雜種稅百四十六萬五千五百六十五圓戸數制及ヒ家屋稅三百九十八萬八千二百四十七圓ニシテ合計一千七百九十三萬五千〇〇八圓ナリ區町村費ノ收入高ハ十八年

度ニ於テ總計千二百九十四萬二千百十一圓ニシテ之ヲ合計スレハ二千〇八十七萬七千余圓トス之ニ國稅ノ收入高六千七百八十七萬余圓(廿二年度豫算ニ依ル)ヲ加フレハ九千八百七十四萬余圓ナリ此レ全國人民カ租稅トシテ負擔スル所ニシテ國家共持ノ義務トシテ納ムルノナリ今全國人口三千八百五十萬ヲ以テ租稅ノ集計ヲ除スレハ一ニ付金五十錢トスニ圓五十錢ノ金額ハ以テ中人以下一月ノ食料ニ供スヘシ然レハ則今日全國人民ハ一ヶ月ノ食料ヲ省テ中央政府ノ費及地方ノ政費ニ供スルモノナリ其負擔スル所重カフスト云フヘラサルナリ

租稅論 大尾





9809
⑤



11



040608-000-2

ヤ-1イ

財政学公債論・財政学講義

小池 靖一/述

[M28?]

BDE-0242

